# あお

扇風機なんてもの、最近はクーラー・エアコンにとって代わられた。でる幕なんぞなくなったかのように見える。ところが洗濯物の乾燥や部屋の空気の循環など、涼しむ以外の役目で使われていたりしている。冬場に使われたりしてまさに夏炉冬扇を地で行く風情だ。

クーラーにくらべ風を送るだけの扇風機は健康によい。人間が持っている汗の気化熱で体温をさげる術をたすけるだけだから自然に近い。クーラーの冷気に弱いという人が扇風機にも弱いというのは聞いたことがない。でもむかしの扇風機はたえまなく風を送るのが問題だった。つけっぱなしで寝て体温が下がり心不全をおこした人もいたくらいだ。自然風は吹いたり止んだり息をする。近頃の扇風機はこれにならっている。若干の進化か。

と言うことでいまでも夏場電気屋の店頭に並ぶ定番商品でありつづけている。

そのむかし、庶民の家庭にはコンセントは満足に設備してなかったし、扇風機自体がすこぶる高価だったから普及していなかった。そんな時代の扇風機のデザインはすごかった。色は高級感を求めて黒にするか安全色といわれた薄緑だった。防護網はついているものの子供の手など容易に入ってしまうもので、ブンブンうなってまわる鉄製の羽根は子供にとってまさに恐怖であった。

いまコンセントが設備してなかったと書いたが、では家庭ではどこから電力を得ていたのだろうか。部屋の天井からぶら下がる電灯線のソケットと電球の間に「ふたまた」と称する器具をはさむ。「ふたまた」は電灯線の分岐器である。電球の差込口のほかにもうひとつ差込口がある。だから「ふたまた」なのである。この口には 2 燭球といわれた小さな電球を付けたり、あるいはさらにコンセント用の器具をねじ込む。すると急増のコンセントができるのである。なんと言うタイトルか忘れたが、昭和初期に時代設定した日本映画で、上流階級の朝飯シーンにトースターの電源コードが電灯のわきからぶらさがっていた映っていた。そんなやり方は当時の日本ではふつうのことであったろう。

なぜそんなことをしたのかというと、古い家屋内にあとから電灯線設備を加えたということがある。しかし、庶民家庭での一番の理由は電力料金なのだった。基本料を最低額におさえたい時、1 戸あたり７灯以下にしなければならなかったからである。ここでいう１灯とは家屋内の本線から分岐した線を言う。つまり、その先に電灯がつく場合はもちろん、コンセントやスイッチも１灯だったのである。玄関先・居室 2 室・台所・風呂場・便所・便所のスイッチ（なぜか便所にはスイッチがあった)、これで 7 灯である。もうコンセントをつける余裕がない。

さて扇風機は昭和 30 年代に入ると、デザイン的に変化した。鉄の羽根ではいかにも重い。

さらに危険だ。それが色鮮やかなプラスチックになった。

そのころ、日本の電機メーカーが香港むけに扇風機を製作した。当時はまだ日本製扇風機が輸出できたのである。さて扇風機の羽根の色は日本で人気の清涼感を強調した青にした。しかも当世、俗にスケルトンタイプなどと呼ばれているシースルーである。

しかし、香港でのこの扇風機の売れ行きは悲惨なものだった。メーカーの担当者はびっくり、日本で売れたものがなぜ香港で売れないのだ。価格か性能か担当者が調べた結果は意外だった。

理由は「縁起が悪い」だったのである。中国で青は葬式の色なのだ。では香港で好まれる色はなにか。それは「金色」である。

香港は 99 年間の借地契約がいつ中国から反故(ほご)にされるかも分からず、いざその時に亡国の民として逃げ延びるには、財産はかさばっているうえ使うあてのない紙幣ではなく gold でなくてはならない。そういう環境下ではリッチな気分に浸れるのは「金色」である。

早速金色の羽根に付けかえて出したところこの商品は大ヒット商品となったという。

日本人にとって「青」は「青空」の色であり、清涼感をもたせるものであろう。好きな色のひとつであろう。でも中国では生活習慣の違いから禁忌の色なのである。

漢字で「あお」色の意味を持つものは「青・碧・蒼」の 3 字である。

全宇宙に充満する電磁波のうち最も多く存在する波長 400nm から 700nm の範囲を人間は可視光線として使用している。そのうち 400nm〜500nm が青の領域である。客観的に言うとこうなのだが、色に関して個人差がないとはいえない。450nm の波長の光を二人の人が見て実際に同じ色相に見たかはわからない。

これから「あお」に関するいくつかの漢字の意味を説明しようと思うが、色を言葉で説明しようとするのだから果たしてご理解いただけるかどうか。

漢字の「青」から始めよう。

ある字典で「青」は銅からとれる顔料の色とある。つまりは銅イオンの色である。硫酸銅溶液をみて頂ければよいだろうか。まさに「青」。これですべて言い切ったとしてもいいのだが、硫酸銅を見たことがない人のために、さまざま言いつらねておくと、

春の色、藍からとれる染料、晴れた空の色（日本人の感覚）、もう少し黒い青（中国人の感覚）、などなど。

さて、よくお分かりいただけたか。実はここでわかってはいけないのである。東アジアの民族にとって単純に「青」は「blue」ではないらしい。

我々は日常青と緑の区別を明確につけているのだろうか。古代人は暖色を「あか」、冷色を「あ

お」といったのだという説がある。五行で四方に配される色は相撲の土俵を飾る房の「青赤白黒」で、中央が「黄」であるという。色彩学から言うと「白黒」は彩度がないから「色」ではないが、まあこの場合色としておこう。この 5 色が基本だ。冷色系の代表としては「あお」なのだが、これはどんな色相であると定義しているのだろうか。

青木が原、青虫、青葉、青竹、青りんご、などどう見ても「みどり」のものを「あお」といっている。さらに三遊亭円朝の話に出てくる塩原太助さんと別れる馬は「あお」であるが、この馬は決して青い色をしているのではなかった、馬の「あお」と呼ばれるものは白馬と黒馬である。暖色じゃないかららしい。

「あお」の意味を持つ漢字の残り 2 種にしても

「蒼」とは、草のあおい色、みどり色、深あお色、あお黒い、薄あお色、草原の色

「碧」とは、あおく美しい石（碧玉）、あお、みどり、あおみどり、濃いあお色、

と中国人も全く青と緑の区別をしてない。

参考までに漢字「緑」は糸偏がついていることからわかる通り、もとの意味が青黄色の絹布で、2 次的意義として青にまぜる黄色の染料をとるイネ科の多年草である。「緑」とは青黄色というからあきらかに「green」であろう。緑色の着物は身分の低いものが着るものであるとされる。緑は中間色であるからだそうな。この「緑」は明らかに「あお」とは見られなかった明度の高い黄緑であったのであろう。

「信号機の『進め』は青か緑か」。私が小学校に入った頃は今ほどの交通安全教育は受けていない。しかし、信号機の色がどういう意味で定義されているかについてはしつこく聞かされた。

『いいですか、信号が青のときは道路を渡っていいけど、赤のときはとまって待っているんですよ』だったのである。

それが、私がハイティーンのときだったか「青・緑」論争があり、その後進め信号の色名は一時期「緑」色になってしまった。確かに信号の色はどちらかと言うと「緑」である。これは国際的にこの色だからそう任意に変えられないという。人によっては「青」のフィルターの裏に白熱電球をつけているのだから「緑」に見えるなどという人がいるが。

しかし、色神異常の人には緑は酷である。色神異常では赤か緑が見えないか見にくい。その中で緑に異常のある人が多い。それが原因で交通事故がおきてはならないから現在は信号の色も青に近づけているそうな。

ただ歩行者用信号は緑のままで積極的には変更していない。人の絵が書いてあるので判別できると言うのがその理由らしい。

図画工作の教育のおかげで私たちは「青」「緑」の区別はついたものと思っていたが、海を見て改めて考えた。私たちは「青い海」といったとき、「近代学校教育で言う青」と思っているのか、「蒼海」つまり青だか緑だかとくに判別していないがいわゆる東アジア人としての「あお」、と思っているのだろうか。自分自身民族的にどんな色認識をしているのか自分でもわからなくなった。